

【主題】 未来学区における小・中学校連携教育の推進

【副題】 「中学0年生プロジェクト」を通じた未来の同級生との交流を中心に

【学校・団体名】 宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校

【役職名・氏名】 校長 宍戸 雅治

1 はじめに

宮城県東松島市では、学力保障（確かな学力の育成・向上）と成長保障（豊かでたくましい心と体の育成）という2つの教育課題の解決に向けた事業の大きな柱として、「小・中学校連携教育」を推進しており、本市の目指す15歳の姿「故郷（ふるさと）に誇りと愛情をもち、志高く、協働して未来を切り拓く人」の具現化に向け、「小学生のまなざしと中学生の背中を生かした教育」を市内全校で実践している。

鳴瀬未来中学校と、中学校区にある2つの小学校、東松島市立鳴瀬桜華小学校、東松島市立宮野森小学校の3校は、令和2年度より、東松島市教育委員会から「東松島市小・中学校連携教育推進モデル地区の学校」の指定を受け、以後、継続して小・中連携の実践を進めている。令和5年度には、市教委からの指導・助言を基に、小学6年生と一緒に中学校での授業を体験する「中学0（ゼロ）年生プロジェクト」を開始した。令和6年度からは、本中学校区は「未来学区」と命名されており、そこで児童生徒は、文字どおり少し先の「未来」を見据えた連携・交流に取り組んでいる。

2 未来学区の小・中学校連携教育

（1）未来学区の課題

鳴瀬未来中の学校課題の1つは、不登校支援である。令和5年度の不登校出現率は、15%を超え、市や全国の割合を大きく上回っている。不登校の理由は一人一人様々であるため、学校では生徒に応じた支援を続けている。その中で、中学校入学後に長期に休む生徒もいることから、本市の教育課題である成長保障の視点を踏まえ、新規不登校の未然防止に向け、小・中連携教育に注力していく必要性を感じている。また、2つの小学校の児童数の割合は、各学年、鳴瀬桜華小が宮野森小の2倍強であり、少数派で、6年間単学年で学校生活を送ってきた宮野森小の児童が直面する中学校入学後のより大きな環境の変化への配慮が必要であることから、市教委より中1ギャップを解消する取組について助言を受けた。なお、3校は隣接しておらず、

施設分離型の連携となるため、交流等を行う場合には、市のスクールバスによる輸送を行っていただいている。

（2）未来学区の方針

小・中連携教育を推進するに当たり、本市の目指す「15歳の姿」を踏まえ、未来学区で目指す「15歳の姿」を「郷土愛、向学心、自立心」と設定し、「教職員」「児童生徒」「教育課程」「地域」の4分野での連携・交流を進めている。実践の方針は次の5点である。

○小・中学校の教職員による小・中連携教育の意義と方向性の共有を図る。（学びを語り合う会の活用）

○日常の学校生活の延長にある小・中連携、小・小連携の活動を実践する。（年間計画への位置付け）

○「中1ギャップ」のハードルを下げるとともに、入学後のケアを行うシステムづくりを行う。

○小・中連携を児童生徒一人一人の「自分事」に落とし込む。（交流の企画からの児童生徒の参画、自己存在感・自己有用感を高める中学生の出番と役割）

○9年間の学び方の共有（協同的な学び）により、互いに支え合える関係を作る。（優しい市民性の醸成）

3 4つの分野での実践（令和6年度の計画）

（1）教職員の連携・交流

①学びを語り合う会（教職員による授業参観と5つの分科会による懇談：中学0年生プロジェクト、でめこん、家庭学習、不登校、小・小連携の5分科会）

②授業研究会、合同研修会（「協同的な学び」の推進）

③小中情報交換会 ④小中引継ぎ会 ⑤幼保小連携

⑥未来学区校長会、小・中連携教育担当者会

（2）児童生徒の連携・交流

①小中合同あいさつ運動（毎月第1水曜日の登校時）

②中総体新人大会壮行式 ※映像を小学校に提供

③新入生・保護者説明会 ※中学生による合唱の披露

④小・小連携活動（小学校の同学年間の交流）

・4年生（1回）・5年生（2回）・6年生（3回）

⑤児童会・生徒会の委員会活動の交流

⑥東松島市子ども未来サミット

⑦中学生による宮野森小での和太鼓指導

- ⑧3校の特別支援学級の交流（「みんなの会」の活動）
- ⑨家庭学習強化ウィーク ⑩でめこんウィーク
- ⑪幼保小の交流 ⑫中学生の幼保小での職場体験

（3）教育課程の連携・交流

- ①教科担任・学園制加配事業（鳴瀬未来中の教員が2校の小学6年生の音楽の授業を専科で行う）
- ②小学6年生の外国語専科の授業（小学校の兼務教員が巡回し、中学校での学習のスタートをそろえる）
- ③中学0年生プロジェクト ※以後0プロジェクトと表記
- ④防災教育・合同引渡し訓練
- ⑤小中連携コーナーの開設（校内掲示等）
- ⑥中学校教員による小学校への出前授業
- ⑦宮城県体力・運動能力向上センター事業
- ⑧東部教育事務所管内学力向上指導員の活用
- ⑨小学校教員による中学1年生への道徳の授業実践

（4）地域・保護者との連携・交流

- ①「ジョブ・カフェ」（学校運営協議会の主催による中学1・2年生と小学6年生対象の職業講話・体験）
- ②未来学区学校運営協議会連絡会（会長・副会長会）
- ③未来学区コミュニティスクール研修会
- ④未来学区民生委員・保護司懇談会
- ⑤特別支援学級後援団体「いちょうの会」との連携
- ⑥クリーンウィーク（通学路や学校周辺の清掃）
- ⑦地域の大人（第三の大人）と児童生徒との交流

4 令和5年度の「中学0年生プロジェクト」の実践

教育課程の連携の1つとして令和5年度から新たに実施した0プロジェクトは、2つの小学校の6年生が中学校に行き、2校混合で仮の学級を作って、中学校の教員と小学校の担任とのTTによる授業を行うもの。学習内容は小学校の教育課程に基づいており中学校の学習の先取りではない。これにより児童が数か月後の自分の姿や自分を取り巻く環境を思い描けると考えた。



写真 第2回の社会の授業（4か月後の日常の授業風景）

（1）実施計画

①ねらい

中1ギャップ解消に向けて、中学校・小学校の教育課程での連携を深め、円滑な進級ができるようにする。

②対象学校・学級（中学校入学時は2学級になる予定）

鳴瀬桜華小学校 6年1組 39名
宮野森小学校 6年1組 16名 計55名

③期日及び教科（2時間扱い）

第1回 令和5年10月25日 算数、外国語
第2回 令和5年12月11日 社会、体育
第3回 令和6年2月19日 理科、国語

④実施方法

- ・あらかじめ、各小学校で児童を2グループに分け、それらを併せて、2学級を編制する。
- ・各回、2時間の設定で2学級が交互に同じ教科の授業を行う。（授業は午前の1、2校時に設定）
- ・実施教科によって、普通教室や理科室、体育館に分かれ、中学生の授業と同じ環境で行う。（教室は実際に中学1年生が使う場所を準備した）
- ・座席配置や少人数グループの編制は、2校の児童が偏らないように事前に決めておく。
- ・授業は、TT方式で行い、中学校の教員がT1、小学校の担任がT2として指導に当たる。



写真 2校の児童が学び合う

・授業では、各校で取り組んでいる「協同的な学び」を取り入れ、ペアやグループでの少人数の学び合いを意図的に設定する。

- ・終了後、2つの小学校合同で活動の振り返りを行う。

（2）有識者からの助言

第2回目には、東松島市小・中学校連携教育推進委員会の視察があり、終了後、委員の方々から実践への励ましと次のような助言をいただいた。（一部抜粋）

- ・T2の役割をより明確にし、配慮が必要な児童への支援や、話合いが滞るグループへの支援を行う。
- ・グループ編制については、事前に情報を共有し、同じ出身幼稚園同士など意図的に行ってもよい。
- ・話合いに入れない児童には気まずさが残る。課題が見られた児童に対し、3回目まで、更に卒業までの具体的な手立てを工夫するとよい。
- ・授業内容が中学校でも生きるようにカリキュラムの工夫を図ってはどうか。

(3) 実施方法の改善

小中でオンラインによる事前の打合せや事後の反省会を実施し、回を重ねながら方法の改善を図った。

- ・1回目は、授業開始前に中学校からの説明や教室への案内を行ったが、2回目以降は、説明を必要最小限に減らし、6年生が来校後、自分で教室等へ向かい授業の準備をするようにした。
- ・授業者の「児童の名前を呼びたい」という希望から、児童が養生テープに大きく名前を書き、上着に貼るようにした。(児童同士も名前を呼び合えた)
- ・T2となる小学校の担任の役割をより具体的にした。

(4) 成果

実施直後の児童の感想は、それまで何回か小学校同士の交流や中学校への訪問を行っているが、「緊張した」というものが多かった。その上で、「最初は緊張したけれど仲良くなれて良かった」「学習が難しくなるのではと不安だったが少し楽しみになった」という緊張感や不安感が緩和し、関係が好転したり期待が膨らんだりする表現が加わっていた。更に中学生となった生徒に、当時を振り返ってのアンケート調査を行った。

実施日：令和6年7月17日（グーグルフォーム）
 対象：鳴瀬未来中1年生54名
 回答：52名（鳴瀬桜華小36名、宮野森小16名）
 質問1：小学6年生の時に行った活動の中で、「良かった」「役に立った」と思うものを選んでください。
 （複数回答可 52名が回答）

- | | |
|--|--|
| ① 小中合同あいさつ運動 | |
| ② 中学校の新人大会壮行式をビデオで見たこと | |
| ③ ジョブ・カフェに参加したこと | |
| ④ 中学0年生プロジェクト | |
| ⑤ 出前授業（中学校の教員が小学校で授業を行う） | |
| ⑥ 中学校での入学説明会・中学生の合唱 | |
| ⑦ 宮野森小の6年生が鳴瀬桜華小を訪問したこと | |
| ⑧ 鳴瀬桜華小の6年生が宮野森小を訪問したこと | |
| ※以下⑨～⑫の選択肢の内容については、実際に体験した生徒の人数に限られます。 | |
| ⑨ 中学校から小学校へ草花のプランター贈呈 | |
| ⑩ 中学校の図書委員による絵本の読み聞かせ | |
| ⑪ 子ども未来サミットでの中学校の生徒会と小学校の児童会の話し合い | |
| ⑫ 宮野森小での中学生による和太鼓指導 | |
| ⑬ その他（自由記述） ※選択者1名、記述なし。 | |

※選択肢行頭の丸付き数字が次の図の選択肢に該当します。

選択肢（質問1）

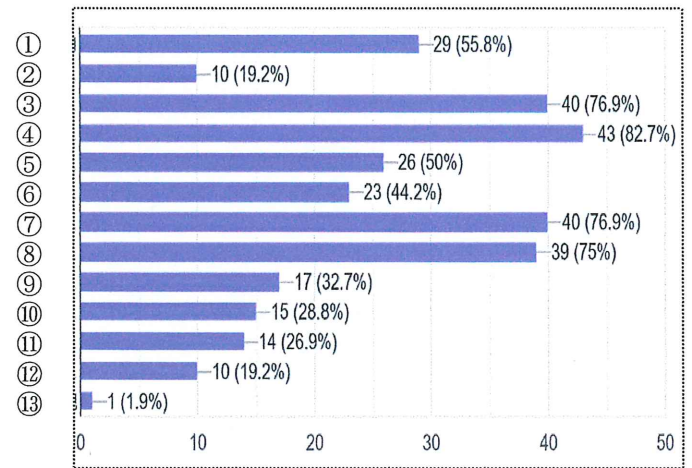


図 中学1年生に対しての小・中連携アンケート結果（単位：人）

アンケート結果から、約80%の1年生（43名）が、④の0プロジェクトに対して肯定的な回答をしている。同アンケートで、「良かった」「役に立った」と回答した生徒に、どんなところが良かったのか自由記述で理由を尋ねたところ（質問2）、類似の回答が多く、その主なものは次のとおりである。

- ・違う学校の人達と一緒に授業して中学生になったら実際にこうなるんだなってことを知れたので良かったと思いました。
- ・中学校の授業はどんな感じなのかなとか中学校に向けての準備ができたところ。
- ・事前に中学校にはどんな先生がいるか知れた。
- ・中学校と小学校の違いを知れたり、他の学校の子と話し合ったりしたこと。
- ・入学前に名前と顔を覚える機会や友だちができる機会があり、入学前の不安が減ったこと、話しやすくなったこと。
- ・すごく自分と向き合えた気がする。

回答内容からは、中学校に入学し3か月が経過し、0プロジェクトの効果をより客観的に捉えられるようになったのではないかという印象を受ける。

「良かった」と回答しなかった生徒にもその理由を尋ねたが、「話が聞こえなかった」「覚えていない」というような内容であった。（3名が回答）

0プロジェクトを通して、6年生は、未来の同級生と一緒に授業を体験し、人（同級生・教師）、場所（校舎・教室）、学習（中学校の授業）への緊張感というハードルを下げ、小中の滑らかな接続ができるように、中学校での実際の生活をイメージできたと考えられる。

中学校の授業者は、次年度入学してくる児童の様子を事前に捉えられたことも有意義だったと感じている。4月、新1年生になっての授業のスタートもスムーズだった。実施当時、6年生の保護者から「子供が楽しいと言っている」と中学校に伝えられたこともあった。

小学校では、第1回の授業中の何気ない他校児童の一言から、第2回に参加するのをためらう児童も見られた。小学校としては0プロジェクトを通して、新たな気づきがあり、卒業までに児童にできることを考える良い機会となった。「緊張感」や「ためらい」「戸惑い」「気まずさ」など人と関わる中で生じた乗り越えるべき感情や困り感に担任らが寄り添い、その克服に向け支援を行うことができた。(上記児童は3回目参加)

(5) 課題と令和6年度の実施に向けて

課題として挙げられたT2の役割の明確化については、回を重ねながらより具体的にしていっていったが、更に中学校の授業者と小学校の担任の共通理解を図り、小中を超えてのTTが機能していくようにしたい。また、中学校の授業者は、小学校の担任と事前の打合せをして学習内容を決めているが、小学校では専科や教科担任制も進んでおり、学級担任との打合せだけでは不十分な点もあった。時間を工面しつつ、過度な負担にならないよう小・中連携して準備することが必要である。

今年度は10月と12月の2回、4教科で実施予定である。6年生の児童数が多いことから、中学校では久しぶりに3学級を想定しての0プロジェクトになる。小学校からの移動に時間がかかることを踏まえ、回数は減らしたが、昨年度のように抵抗感を感じた児童の気持ちの克服のためにも、複数回の実施が必要である。今後、教科等を検討し、より効果的に実施したい。

5 小・中連携を児童生徒の「自分事」に

0プロジェクト以外の小・中連携については、前述のアンケート結果にあるように小・小連携での交流活動への肯定的な回答が多かった。今年度は、交流を6年生1学年から、4年生までの3学年に広げており、既に交流を実施している学年もある。計画には児童も加わり、2校の児童が楽しく過ごせるような企画を意欲的に考えているが、いざ交流の場になると、初めのうちは緊張感が先に立ってしまい、徐々に打ち解け、名残惜しく別れるという流れをたどっている。また、多数派である鳴瀬桜華小の児童は、人数の偏りを自覚し、自分たちがどのように宮野森小の児童に接すれば

よいか、シミュレーションしてくるが、いざ対面してみると、やはり思うようにいかないことも生じる。交流には、児童生徒自らの試行錯誤も大切である。

アンケートからは、「中学生の背中」により期待したい部分も見えてきた。今年度は中学生がリーダーシップを発揮する活動を増やしており、例えば、鳴瀬桜華小でのあいさつ運動の時間中、鳴瀬未来中の生徒会が、小学校の先生方の協力を得て、一緒にラジオ体操を行うことを計画し、実践している。また、昨年度から始まった宮野森小出身の中学生による夏休みの和太鼓指導においては、中学生の出番や役割をより多くし、中

学校内での和太鼓ボランティア募集のポスター掲示や呼びかけ、小学校の先生との打合せを行い、練習会に臨んでいる。



写真 小中一緒にラジオ体操

6 おわりに

令和5年度の0プロジェクトをはじめとする小学6年生を対象とした小・中連携の実践を経験した現在の中学1年生には、夏季休業日までの71日間の授業日のうち10日以上欠席した生徒はいない。「笑顔」を学年目標に掲げ、小学校からの引継ぎを基に、一人一人の生徒の良さを認めながら指導している1学年部を中心とした対応が生きている。

今年、パリオリンピックが開催され、多くの日本選手が活躍したが、中でも、宮城県の高校生がメダリストになられたスケートボードは印象深い。その報道の中でよく耳にした言葉が、「仲間と楽しみ、教え合う」そして「先輩の背中を追う」。ひたむきな努力が土台にあつての言葉だが、これは、小・中連携教育を児童生徒の自分事と捉えることと重なる言葉だと考える。人との関わりが児童生徒の成長につながる環境を整え、小学生同士が楽しく学び合いながら、中学生の背中を追うことができるように、少し先の未来からより遠くの未来まで見据えた連携を今後も継続していきたい。

最後に、本論文は、鳴瀬未来中学校として執筆しておりますが、内容は鳴瀬桜華小学校と宮野森小学校との協働による実践であり、また、その実践に当たっては、東松島市教育委員会から多くの指導・助言をいただいておりますことを申し添え、実践に関わられた関係各位に感謝申し上げます。ありがとうございました。